

六波羅滅亡について：

『梅松論』・『陸波羅南北過去帳』・『太平記』・
『太平記秘伝理尽抄』を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奥, 智鶴 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4726

六波羅滅亡について

—『梅松論』・『陸波羅南北過去帳』・『太平記』・『太平記秘伝理尽鈔』を通して—

奥 智 鶴

はじめに

六波羅勢四百三十余人が蓮華寺で命を絶つたのは元弘三年（一二三三）五月九日。その十三日後には北条高時等一門が自害し鎌倉幕府が滅亡するなど、この年の五月は時代が大きく変動した時期であった。このような時代の転換期を『太平記』¹はどのような視点から捉えるのか。本稿はその問いに答えるべく、六波羅滅亡を取り上げ、『太平記』世界の一端を明らかにしようとするものである。

六波羅滅亡場面に関する先行研究で最も注目されるのは、鈴木登美恵氏の論考である。氏は『陸波羅南北過去帳』²（以下『過去帳』）から掬い取れる六波羅勢最期の様子を捉えつつ、それに対して『太平記』がどのように滅亡を描写したかを読み取る。例えば『過去帳』には「討死自害交名」との記述があり、六波羅勢と野伏との間に合戦があったことを物語る。だが『太平記』にはそうした戦闘場面がないことから、鈴木氏は『太平記』作者は（略）六波羅探題越後

守仲時以下四百二十三人、鎌倉武士の道を全うしたこの人々のために、天運を悟って自害の覚悟を定める時間的余裕と、それにふさわしい静かな死場所とをしつらえたのであった」と述べる。さらに『太平記』の六波羅勢番場自害の段の成立が、何らかの意味で佐々木氏と関わっていることを予想させる」と、その成立背景にも触れる。鈴木氏以外では、谷垣伊太雄氏が『太平記』巻九全体を見通した上で「〈負〉の表現（否定的表現）を多用しつつ、その内的崩壊状況を描いていく」ことに着目した論考や、六波羅探題北条仲時の子息に焦点を当て、その再起記事が『太平記』欠巻にある可能性を指摘する武田昌憲氏の論等³がある。

これらの先行研究に導かれつつも、しかし『太平記』の方法や構成を明らかにするためには、さらなる検討が必要と考える。すなわち、『過去帳』や『梅松論』⁴等がそもそも六波羅滅亡という事態をどのように捉えたのか、また『太平記秘伝理尽鈔』⁵（以下『理尽鈔』）は『太平記』の何を描き、何を描かなかったか等の問題は、『太平

『記』を読み解く上で無視できない。だがこれまで『梅松論』や『過去帳』は一史料としてのみ扱われがちであり、『理尽鈔』が記す六波羅滅亡に関しても未だ言及がなされていない。それらに目を配ることで、鈴木氏等が取りこぼしたのも見えてくるのではないか。そこで第一章は『梅松論』を取り上げ、どのような側面から六波羅滅亡を描くのかを整理する。第二章は『過去帳』に記載された名前に着目し、『太平記』との異同をみていく。それらを踏まえた上で、第三章では『太平記』が『梅松論』とは異なる方法で滅亡を描くことを述べる。さらに第四章は『理尽鈔』が『太平記』世界をどのようにに享受したかを捉えることで、『太平記』が何を描こうとしたのかを明らかにすることを試みる。

一 『梅松論』が描く六波羅滅亡

官軍に破れた六波羅勢が都を落ち自害するまでというのは、元弘三年（一一三三）五月七日から九日までの僅か三日間の出来事である。この六波羅滅亡に関して『保曆間記』や『神皇正統記』⁹は、彼等防戦ト云ヘドモ不叶。主上而上皇ヲ先立奉テ関東へ落行ク。近江国馬場宿ニテ。先帝ノ御方軍勢軍ヲ始ム。武士ハ則滅ス。仲時西山ニ取上テ合戦スト云ヘドモ。不叶シテ腹ヲ切畢。主上上皇ハ都へ還御也ケリ。（『保曆間記』）

五月八日ノコロニヤ、都ニアル東軍ミナヤブレテ、アヅマヘコ、ロザシテオチユキシニ、両院・新帝オナジク御ユキアリ。近江

国馬場ト云所ニテ、御方ニ心ザシアル輩ウチイデニケレバ、武士ハタ、カフマデモナク自滅シヌ。両院・新帝ハ都ニカヘシ奉リ、官軍コレヲマボリ申キ。（『神皇正統記』）

とのみあり、いずれも簡略な記述に留まる。「増鏡」¹⁰は都落ちから六波羅勢自害後までを、両院や西園寺大納言公宗・資明宰相・按察大納言資名など主に公卿の動向に目を向ける。それに対して『梅松論』は六波羅勢が自害するまでの経緯を次のように記す。

五月七日卯時	足利勢と六波羅勢との合戦
未刻	大宮での合戦に破れ、六波羅勢は引き退く
夜半	六波羅勢は城郭に引き籠って戦う 六波羅を出る↓久々目路↓勢多ノ橋
八日	途中、四宮河原で北条時益（六波羅探題南方）は流矢によって死去
九日	守山で野伏に襲い掛かられ 馬場宿の上の山を皇居とする
西時	近江・美濃・伊賀・伊勢の悪党人等と合戦 北条仲時（六波羅探題北方）の自害。相従う輩数百人

七日は終日戦いに明け暮れ、敗退した六波羅勢はその夜に京を出立。八日は野伏の襲撃をかわしながら近江へ。九日、漸く番場に辿り着くも、街道を塞ぐ悪党人等によって再び行く手を阻まれる。追

い詰められた北条仲時はその日の西時、まさに日没とともに自害したとある。すなわち『梅松論』は六波羅勢が滅亡するまでの道程と時間の推移とを克明に辿るのである。これは『太平記』とは大きく異なる点である。後述するように『太平記』には仲時と妻子との別離譚、中吉弥八の活躍、糟谷宗秋と野伏との合戦、佐々木時信への期待と裏切りなど様々な話が語られるが、『梅松論』はそうした個々の情報には目を向けない。そのことを端的に示しているのは、六波羅探題南方北条時益の死去に関する叙述である。

時益が蓮華寺に至る前に死去したことは、『梅松論』・『増鏡』・『太平記』で一致する。ただし死場所について『梅松論』は「四宮河原」、『増鏡』は「守山の辺」、『太平記』では「苦集滅道ノ辺」との異同があり、時益が六波羅を出て間もない混乱の中で死去したことが窺える。『梅松論』はその時の状況を次のように記す。

南方ノ時益ハ七日夜四宮河原ニテ流矢ニアタリケルガ死去ノ間、家人等頭ヲ取テ当所ニ持来、仲時一所ニ於テ各自害ス。

「当所」は仲時ら六波羅勢が自害した蓮華寺を指し、「家人」とは北条時敦・時益親子に仕えた譜代の家人糟谷氏等が該当する。つまり『梅松論』は、糟谷氏ら家人が四宮河原で死去した時益の首を持って蓮華寺に行き、仲時や六波羅勢と共に自害したと伝える。事実、蓮華寺で討死・自害した人々の名前を記す『過去帳』には糟谷氏ら「南方内人々」(＝時益家人)の名が挙がっており、主を失った彼らが確かに蓮華寺に行き、そこで自害したことが裏付けられる。ところが『太平記』をみると、時益の家人が蓮華寺に向かった形跡はな

い。「苦集滅道ノ辺」で時益が落命すると、彼に従っていた糟谷七郎は「後生マデ主従ノ義ヲ重クスルヨリ外ノ事アラジ」とその首を掻き落とし、自らも自害したとある。『太平記』の叙述に従えば、蓮華寺にいた仲時らが時益の死をいつ知ったのか、あるいは知らずに自害したかは定かではない。この例からも判明するように、『太平記』と『梅松論』とは視点が異なる。暗闇の中で誰が射たとも知れない流矢によって死んだ時益を、『太平記』は主従という枠組みの中で捉え直し、『梅松論』は時益死去の報が誰の手でどこに運ばれたかという点にこだわるのである。

『梅松論』のもう一つの特徴は、六波羅勢と主上らとの関係を密接に描く点にある。『梅松論』では仲時・時益が洛外への行幸を決定した理由について、

我等命ヲ落サバ同ハ帝都ニ於テカバネヲサラサン事尤本意ナシ。其ハ私ノ儀也。当所皇居タル間、討死自害セバ、禁裏仙洞ノ御為不可然。行幸ヲ洛外ニ成奉リ、且ハ関東ノ合力ヲ相待、且ハ金剛山ヲカコメル大軍ニ事ノ由ヲ通ジテ、合戦ヲトグベシ。

この考えによるものと記す。その決定に主上等は「宣任武家ノ心ニヨシ被仰」たという。また連日の合戦と気の抜けない移動により疲労困憊の状況に追い込まれた六波羅勢は「乍恐仙洞ヲ害シ奉リ、各討死自害スベキ」と発言。それに対して仲時は、

我等命ヲ生テ君ヲ敵ニウバハレムコソ恥ナルベケレ、命ヲステ後ハ死骸一カキン有ベカラズ。

と述べ自害したとある。つまり仲時は死ぬことで、天皇を敵に奪

われるといふ不名譽から解放されたと『梅松論』は説くのである。主上への忠義とそれに支えられこまで落ちてきた主上、『梅松論』の六波羅勢と主上らとは運命共同体ともいえる公武関係の中で描写される。『太平記』にはこのような記述はない。行幸を決定するきっかけは、

是程ノアサマナル手城ニ、主上々皇ヲ籠マヒラセテ、名將匹夫ノ鉾ニ名ヲ失セ給ハン事、口惜カルベキ事ニテ候ハズヤ

と糟谷宗秋が進言したことにより、そこには『梅松論』が記す「禁裏仙洞ノ御為不可然」との言葉は見受けられない。仲時が自害する際の言葉をみても『太平記』には、

武運漸ク傾テ、当家ノ滅亡、近ニ有ベシト見給ナガラ、弓矢ノ名ヲ重ジ、日来ノ好ヲ忘ズシテ、是マデ付纏リ給ヘル志、中々申ニ不及。其報謝ノ思深シト云共、一家ノ運已ニツキナバ、何ヲ以テカ是ヲ報ズベキ。今ハ方々ノ為ニ自害ヲシテ、生前ノ芳恩ヲ死後ニ報ゼント存ズル也。

と家臣に向けられた発言であって、主上に関しては何ら言及されていない。これらの点からも『梅松論』の独自の視点が判明する。

以上のように、『梅松論』は六波羅勢と主上という枠組みの中で六波羅勢の死を捉え、そこに行き着くまでの時間の経過や道程を詳細に記すことで、六波羅勢が孤立してゆく様を描くのである。

二 『過去帳』・『太平記』における陶山氏について

さて『梅松論』には、仲時を始め六波羅勢数百人が自害したことを述べた後、「此時腹切者、名字等馬場道場ニ注置、世ノ知所也」との記述が見られる。「此時」とは六波羅勢が自害した時であり、「馬場道場」とは蓮華寺を指す。すなわち自害した六波羅勢の名前が蓮華寺に書かれており、それは多くの人に知られていたと言っているのである。『梅松論』が記すこの情報は、『過去帳』・『太平記』との前後関係を解く鍵として、すでに岡見正雄氏をはじめ鈴木登美恵氏・高橋昌明氏に指摘がある。三者の説をまとめると、現存する『過去帳』は建武二年（一三三五）以降のものであること、そして『梅松論』の記述が示すように、そのもととなるような交名が蓮華寺に存在したこと、「太平記」は『過去帳』あるいはそれに近い記録類を参考にした可能性があること等が述べられている。では『太平記』が見たであろう『過去帳』はどのような内容なのか、『太平記』とのズレはあるのかを検証することとする。

『過去帳』は蓮華寺一向堂前で討死・自害した六波羅勢の交名を記したものである。名前は六波羅探題北方北条仲時を筆頭に四十二人、続いて「一向堂大庭討死」した八人、「南方内人々」三十人、「一向堂佛前自害」した百九人を書き連ねる。それ以外にも「惣而於當寺討死自害人数肆佰三拾余人雖然分明交名不知輩者不注之云々」との言葉が示すように、名前の判明しない者も含めると蓮華寺で討死・自害した人数は四百三十余人にのぼるといふ。また「彼亡魂幽

靈為往生極樂證大菩提四十八日間常行三昧念仏修行・「彼於堂前或討死或自害為弔厥尊靈四十八日常行三昧之唱念仏祈頓證得悟佛果」といった文言から、その「亡魂幽霊」を弔うため蓮華寺住持が四十八日間の常行三昧念仏を修行したことが『過去帳』から判明する。さらに「南北之両君諍加階态国位傾城都痛諸劾」と、南北朝の両天皇が加階を諍い、国位を恣にしたとの批判が見られることも注意される。『過去帳』はあくまでも六波羅勢側に立ち、武士ではなく南北両朝の天皇による争いがこの事態を招いたと述べるのである。

この『過去帳』に記された六波羅勢百八十九人について、高橋昌明氏は「蓮華寺過去帳の顔ぶれが語るもの」として、彼らが「生きて明日のない探題と被官たち、得宗被官や六波羅探題直属の西国御家人たちばかりだった」ことを指摘する。また鈴木登美恵氏が述べるように、『過去帳』に記載された年齢をみると彼らの中には「ほとんど戦闘力に数えられぬ、六十歳を越えた老人や十五歳にも満たぬ少年の姿も、混じっていた」のであり、彼らが周囲から孤立し死を選択せざるを得ない状況にあったことを物語る。中でも最も犠牲が大きかった一族は陶山氏である。『過去帳』には「一向堂佛前」において陶山次郎清直・同備中守清房・同与次清泰・同小四郎敏信・同四郎入道祥宗・同九郎元良・同四郎盛宣・同三郎敏忠・同与三清弘・同彦九郎清忠・子息七郎真清・同彦三郎俊景・同又四郎敏実・同紀七敏直・同進藤五入道正通・同又三郎真次・同肥後房海範・同新三郎祥近・同新次郎良房・同小五郎真倫、以上陶山一族二十名が自害したとある。これは『過去帳』に名前が挙がる氏族の中で最も

数が多い。ところが『太平記』に目を転じると、陶山氏は陶山次郎・同小五郎の二人の名前しか記さない。この違いについてはこれまで何ら注意が払われてこなかったが、『太平記』と『過去帳』との間のズレを示す例として注目される。両者の前後関係を考えるならば、もともとなる記録に陶山一族の名があり、『過去帳』はそれを踏襲した可能性が高い。そして『太平記』はそれとは異なり、陶山一族の名前を大幅に削除したと考えられる。ではなぜ陶山の名前を削らなければならなかったのか。それを解くことは『太平記』の方法を探る手がかりを与えてくれる。そこで『太平記』にとって陶山氏がどのような存在なのかを整理しておく。

『太平記』は陶山氏の活躍を全く描かなかつたわけではない。むしろ陶山は勝利を呼び込む人物として位置付けられる。『太平記』巻三「陶山小見山夜打笠置没落事」では、六波羅勢が笠置の城を攻めあぐねていた中、陶山藤三義高・小見山次郎某が五十余人の一族若党と共に城中へ忍び入り放火。これをきっかけに戦況は変化し、笠置の城は陥落した。また巻八「三月十二日赤松寄京都事」で主上兩上皇六波羅臨幸事「十一日合戦事」では、赤松勢との合戦で河野九郎左衛門尉・陶山次郎勢が勝利。これにより河野は対馬守に、陶山は備中守に任ぜられ、「哀弓箭ノ面目ヤト、或ハ羨ミ、或ハソネミ、其名天下ニシラレタリ」という。さらに巻八「禁裏仙洞御修法事」西岡合戦事」では、再上洛した赤松勢に対し六波羅勢は敗退、人々は「哀レサリトモ陶山川野ヲダニ向ラレタラバ、是程ノキタナキ負ハセジ物ヲ」と笑い、京に残っていた「河野陶山ガ手柄ノ程ハ、イ

ト、名高ク」なつたとある。実際、巻九「五月七日合戦事」六波羅落事」には「内野へハ陶山河野宗トノ勇士、二万余騎ヲ差ソヘテ向ケラレタレバ、官軍モ無左右不懸入」との記述や、足利勢の高高二郎重成が「先日度々ノ合戦ニ、高名シタリト聞タル陶山備中守、河野対馬守ハヲハセヌカ、出合給へ」と呼びかけたこと等が記される。

一方、陶山とは対照的に描かれるのが高橋や隅田である。『太平記』巻三「陶山小見山夜打笠置没落事」には、陶山たちが笠置城中に忍び込む前の出来事として、抜け駆けした高橋・小早河が官軍に包囲され惨敗、平等院の橋際に高橋・小早河を笑う落首の札が立ったことが記される。巻八「三月十二日赤松寄京都事」主上兩上皇六波羅臨幸事」十二日合戦事」においても両者は対比的に描かれる。河野・陶山勢は蓮華王院での合戦に勝利するが、隅田・高橋勢は西七条辺の寄手に苦戦。それを見た陶山は「此陣ノ軍未決前ニ、力ヲ合テ御方ヲ助タリ共、隅田、高橋ガ心ノニクサハ、我高名ニゾイハムズラン。暫ク置テ事様ヲ御覽ゼヨ」と言つて見物。その後「余リニ長事シテ、御方ノヨハリシ出シタラムモ由ナシ、今ハイザヤ懸合セム」と参戦し、西七条の寄手は敗走する。河野・陶山の武功が評価された翌日には、隅田・高橋が手柄欲しさに首をかき集めて六条河原に並べたこと、その中には赤松円心と札のついた首が五つもあつたことから、「頸ヲ借タル人ハ、子ヲ付テ可返」と京童部に笑われたとある。

このように『太平記』では、落首・京童部によって笑われる高橋・

隅田などは対照的に、陶山は六波羅を勝利に導く人物と位置付けられていることが確認できる。ただしそれは巻八までである。巻九「五月七日合戦事」六波羅落事」以降、すなわち六波羅勢が都落ちを決定した後、陶山が活躍する場面はない。また主上の脇に当たった流矢を陶山が「馬ヨリ下リ、矢ヲ抜テ御疵ヲスウ」との記述がみえるが、それ以外の陶山の行動については不明であり、華々しく戦う姿や、『過去帳』に記される陶山一族の姿もない。『太平記』が六波羅滅亡場面において陶山の活躍を描写しなかった理由、それは彼が六波羅勝利の構図の中に位置付けられた人物であり、そのような存在は六波羅滅亡という記事構成においてはむしろ妨げとなるからである。

『過去帳』と『太平記』との記述の違いは陶山氏以外にも見受けられる。

過去帳	太平記 (西源院本)	太平記 (古活字本)	太平記 (天正本)
越後守仲時	越後守仲時	越後守仲時	越後守仲時
桜田治部大輔入道 浄心	×	×	×
同刈田彦三郎師時	×	×	×
×	糟谷三郎	糟谷三郎宗秋	糟谷三郎宗秋

例えば右は『過去帳』冒頭に挙げられる名前を表に整理したものである。『過去帳』は仲時の次に桜田治部大輔入道浄心・同刈田彦三

郎師時を挙げるのに対し、『太平記』諸本^④に彼らの名前はなく、代わって糟谷三郎宗秋が記される。これは『太平記』諸本間で一致している例だが、名前の取捨選択が諸本により異なる場合もある。

過去帳	太平記 (西源院本)	太平記 (古活字本)	太平記 (天正本)
土肥三郎則実	×	×	土肥三郎
同五郎元実	×	×	×

ここに記される土肥氏は、近江箕浦荘地頭かつ蓮華寺の檀那でもあった土肥元頼に連なる一族の可能性がある。蓮華寺とは所縁のある土肥氏の名前が『太平記』西源院本や古活字本にはないが、天正本には記されるという点は興味深い。この他にも、

過去帳	太平記 (西源院本)	太平記 (古活字本)	太平記 (天正本)
華房六郎兵衛入道 全幸	尊 ^{ヘナラセ} 六郎 入道、同七郎 三郎、子息彦 三郎、同小五 郎、子息彦五 郎、同孫四郎	華房六郎入道	×
毎田三郎則弘	×	毎田三郎	前田二郎
高見孫三郎逝好	高坂孫三郎	高境孫三郎	高境孫三郎
江馬彦次郎常久	江馬彦次郎	江馬彦次郎	江馬彦四郎

とあるように、『過去帳』と『太平記』諸本間との異同は複雑である。両者の関係について検討しなければならない問題は多く残されているが、それは今後の課題としたい。ただ確かに言えることは、『太平記』が『過去帳』をそのまま踏襲したわけではないということである。先の陶山氏の例が示すように、『太平記』は六波羅滅亡の構図に沿わない人物は削除するなど改変を加えている。では『太平記』はどのように六波羅滅亡を描くのだろうか。

三 『太平記』が描く六波羅滅亡

『梅松論』が六波羅滅亡までの時間と経路を克明に描写するのに対し、『太平記』巻九が記す六波羅最期は左表のように展開する。

七日	尊氏、篠村宿立出。
巳刻	合戦始まる。六波羅勢は敗退。
夜	多数の六波羅勢が離脱。糟谷宗秋の進言により、東国下向が決定。
	仲時と妻子との別離。
	苦集滅道での時益死去。糟谷七郎がこれに従う。
	四宮河原での王上受難。中吉弥八の機転による危機脱出。
その日	主上らは「篠原ノ宿」に到着。天台座主梶井品親王は伊勢へ赴く。
	先帝第五宮軍が番場宿東の小山に陣取る。

朝	先陣の糟谷は「番場ノ呼向」で合戦。 糟谷は大勢の敵兵・錦の旗を見て、麓の辻堂で後陣を待つことを決定。
	後陣の「佐々木時信」への期待と裏切り。
	仲時自害。糟谷ら「六波羅勢四百三十二人」が後に続く。
	先帝第五宮の官軍は、主上たちを長光寺（国分寺）へ。
	「日野資名・参河守友俊」は「遊行ノ聖」の元で出家。 主上たちは都へ。

『太平記』には両六波羅探題を始め、家臣の糟谷宗秋・中吉弥八・佐々木時信、主上や梶井二品親王、日野資名ら公卿、敵となった先帝第五宮や野伏など、様々な立場の人物たちが登場する。そして注目すべきは、仲時と妻子との別離譚や中吉弥八の機転による脱出譚など、実はここに描かれる彼等の話のほとんどが『太平記』独自のものであり、他の史料類にはないという点である。しかも糟谷宗秋と両六波羅探題、同じく糟谷宗秋と佐々木時信、主上と先帝第五宮など、それぞれが対照的な人物として位置付けられている点も見逃せない。以下、その点について整理することで『太平記』の方法を探ってみたい。

〈糟谷宗秋と両六波羅探題〉

六波羅勢が敗退し東国下向を決定するまでの経緯について『梅松論』は、

六波羅勢ハ城郭ニ引籠リケリ。其中ニ家ヲ思、名ヲ惜勇士等カケ出戦シ程ニ、七日ハ暮ニケリ。サル程ニ城中多心替シテ、將軍ノ御方ハ参ケレバ、両六波羅北方越後守仲時、南方ハ越後親衛時益相議シテ云ク、
と、仲時・時益の両六波羅探題の「相議」の結果、関東下向の決定がなされたとある。一方『太平記』は「タビアキレタル計」の武士・「消人計ノ御気色」の公家の様子を描写した後、両六波羅探題の姿について次のように述べる。

両六波羅弥加様ニ城中色メキタルサマヲ見テ、叶ハジトヤ思ケン（西源院本）

両六波羅弥加様ニ城中ノ色メキタル様ヲ見テ、叶ハジトヤ思ヒナレドモ、加様ニ城中ノ色メキタル様ヲ見テ、叶ハジトヤ思ヒケン（古活字本・天正本）

「氣ヲ失テ網然」とする仲時・時益の姿、そのような城中の様子に「今マデ無貳者トミヘツル兵」までもが「叶ハジ」と落ちていったとある。つまり『太平記』は六波羅の統率者である両六波羅探題の戦意喪失が主力兵の離脱を招いたと説くのである。そんな彼等に代わり主導権を握る人物として登場するのが糟谷三郎宗秋である。

糟谷三郎宗秋、六波羅殿ノ前ニ参テ申ケルハ、「(略)主上・々皇ヲ取奉リ、関東へ御下候テ後、大勢ヲ以テ京都ヲ被責候ヘシ。(略)ト、再三強テ申ケレバ、両六波羅ゲニモトヤ思ハレケン、『太平記』は宗秋が「氣ヲ失テ網然」とする両六波羅探題に対して「再三強テ申」したので下向が決定したとするのである。宗秋は

『過去帳』や系図・古文書などにも登場せず、『太平記』でのみ活躍が描かれる人物である。よって彼が実在したかどうかは定かではないが、糟谷氏といえは六波羅探題南方北条時敦・時益に仕えた譜代の家人である。時益家人である糟谷氏が、六波羅探題北方の仲時家人にかわって六波羅勢を率いる人物として登場するのは理由がある。先述したように、『過去帳』は仲時に続けて得宗家傍流の桜田氏、北条氏一門の荻田氏、仲时被官の高橋氏、仲時の父基時の被官であった隅田氏等を記し、また最も犠牲が多かった一族として西国御家人の陶山氏を挙げる。ところが『太平記』の六波羅滅亡場面では彼らに活躍の場は与えられない。第二章でも述べたように、陶山氏は六波羅を勝利に導く人物として、隅田・高橋氏は陶山氏とは対照的に笑われる人物として位置付けられる。つまり彼らはいずれも六波羅滅亡という構図の中では描けない人物たちなのである。そこで仲時家人に代わり、もう一方の探題である時益譜代の家人糟谷氏を登場させたのである。『太平記』での糟谷宗秋は、東国下向を促しただけでなく、僅か三十六騎で先帝第五宮率いる五百余人の野伏を蹴散らすなど活躍した様子が描かれる。まさに糟谷氏は六波羅探題に仕えるすべての家臣の代表として位置付けられるのである。

積極的な糟谷氏に対して、仲時・時益は別離譚・主従譚といった枠組みの中で語られる。下向決定後、仲時は妻子に別れを告げるも互いに離れ難く時を過ごす。しかし時益に急かされ、仲時は鎧の袖に縋りつく妻子を引き離して出立したと『太平記』は記す。約一〇〇字を費やすこの別離の場面は、四面楚歌の故事を引用すること

で項羽と虞美人との話に重ねあわせられ、逃れられない運命に別れを余儀なくされる夫婦の姿を捉える。天正本は故事を引かないが、泣き伏す妻子たちが「かくてあるべきにあらねば」と泣く泣く門を出る様子、それを「思ひ遣られて行く行くもその跡を返り見給」う仲時の心情に言葉を尽くす。『太平記』では死を前提とした別離を通して心弱い人間の一面を仲時の中に描きこむのである。

時益は糟谷七郎との主従関係に話の焦点があてられる。時益が流矢にあたり命を落とすと、彼に従っていた糟谷七郎は「後生マデ主従ノ義ヲ重クスルヨリ外ノ事アラジ」とその首を掻き落とし、自らも自害したという。『梅松論』では時益と共に自害した家臣の姿を描かないが、『太平記』は「主従ノ義」による死を描くことで密接な主従関係を盛り込む。とくに天正本では「夢かどだに思ひもあへず」・「ただ流れに船を漂はせ、闇に灯の消えたる心」・「余りに見るともとほしく」と糟谷七郎の主を慕う気持ちを綿々と描くなど、裏切ることなく主に使える家臣の姿を描く。

これらの話は『梅松論』などにはない。『太平記』は六波羅勢を率いる実務的な役割を糟谷に担わせ、仲時・時益は滅びの構図の中で別離譚や主従譚といった枠組みでもって描くのである。

〈糟谷宗秋と佐々木時信〉

六波羅勢先陣を務める糟谷宗秋は、先帝第五宮軍との合戦後、「後陣ノ佐々木ヲ御待候テ、近江国へ引返シ、暫クサリヌベカランズル城ニ楯籠テ、重テ関東ノ勢ノ上洛センヲ御待候ヘカシ」と、後

陣佐々木時信の到着を待って近江国で体制を立て直そうと進言する。しかし時信は来なかった。

佐々木判官時信ハ、一里計引サガリテ、五百余騎ニテ打ケルガ、何ナル天魔波旬ノ所為ニテカ有ケン、六波羅殿ハ番馬ノ辻堂ニテ、野伏共ニ取籠ラレテ一人モ不殘被討給フタリトゾ告タリケル、時信今ハスベキ様ナクテ、愛智河ヨリ引返シ、儼命ニ任テ、京都へ上ニケリ。

『太平記』は、先陣の六波羅勢が全員討たれたとの報を信じた時信は愛智河より引返したと記す。さらに天正本には「一族の佐々木佐渡判官入道道誓、足利殿にあれば「彼に言ひ合はせて、自過を通れん」とて、急ぎ京都へぞのばりける」とあり、保身のために足利尊氏の側近佐々木道誓を頼る姿が付け加えられる。この話も『梅松論』を始め史料類にはない記述であるが、時信は建武政権下で雑訴決断所第七番を務めており、このとき六波羅勢と最後まで行動を共にしなかったことは事実のようである。鈴木登美恵氏は「愛智河」は佐々木六角家の本拠地に程近く、そこに「手兵を集結して動かなかったことを、言外に物語っている」と述べる。時信以外にも、小早川貞平が蓮華寺から引き返すなど六波羅勢とは違う道を行んだ者も多くいたであろうことは高橋昌明氏に指摘がある。ところが『太平記』は時信一人が裏切ったように描く。六波羅勢が自害した蓮華寺は近江であり、時信はこの時まさに近江守護であった。その時信が寝返ったことは、六波羅勢にとっては足を掬われたようなものである。実際『太平記』では時信の裏切りを契機に六波羅勢が一気に滅亡の道

を辿ったとする。

越後守仲時ハ、暫時信ヲヲソシト待給ケルガ、待期過テ時移リケレバ、サテハ時信モハヤ敵ニ成テケリ。今ハ何へ引返シ、何マデカ落ベキナレバ、サハヤカニ腹ヲ切ランズル物ヲト、中々一途ニ心ヲトリ定テ、気色涼クゾ見へ給ケル、

それは頼みの綱が切れた瞬間であり、まさにそのとき六波羅勢は完全に孤立無援となったことを物語る。『太平記』はその後、延々と亡者の名を書き綴ることで、六波羅勢が周囲から孤立し、死へと追いつめられた状況を描いてみせたのである。

時信は六波羅を見限った人物の代表のように描写され、一方、糟谷宗秋は仲時・時益と共に自害した六波羅勢の代表のように描かれる。両者を対照的に配置することで『太平記』は、六波羅滅亡の瞬間に全く異なる生き方をした武士の姿を捉えたのである。

〈主上と先帝第五宮〉

下向途中に矢に当たり負傷した主上（光厳天皇）は、欲心熾盛の野伏たちに取り囲まれるが、中吉弥八の機転のより無事に篠原にたどり着いたという話が『太平記』にある。やはり史料類にはない話であるが、『太平記』諸本間で大きな違いもなく、早い時期に作られ固定化した話と考えられる。この場面には、暗闇の中の襲撃、朝霧の中に立ち現れた五・六百人の野伏、相手が主上でも意に介さない野伏たちの姿、中吉と野伏の息詰まる戦闘、そして中吉の謀り、騙される野伏たち、といった数多くの要素が盛り込まれ、それらを

次から次へと展開させることで『太平記』は緊迫した状況を作り上げる。ここで注目したいのは主上と野伏との関係である。欲心熾盛の野伏たちに襲われたのは紛れもなく現主上である。しかし野伏たちは主上に対して、

如何ナル一天ノ君ニテモ渡セ給へ、御運盡テ落サセ給ハンスルヲ通シ奉セジトハ申マジ、輒ク通りタク被思召バ、御共仕リタル武士共ノ、馬物具ヲ皆捨サセテ、心安ク落サセ給へ、

と言いつ放つなど、その権威は全く認めない。一方、先帝第五宮と「山立・強盜・溢者」等との関係はそれとは正反対に位置する。

先帝第五宮御遁世ノ体ニテ、伊吹ノ麓ニ忍デ御坐有ケルヲ、大将ニ取奉テ錦ノ御旗ヲ差擧ゲ、東山道第一ノ難所番馬ノ宿ノ東ナル、小山ノ峯ニ取上リ岸ノ下ナル細道ヲ中ニ夾ミテ待懸タリ、「山立・強盜・溢者」たちは、現主上ではなく遁世中の先帝第五宮を権威として担ぎ出し、落ち延びる六波羅勢を待ち構えていたのである。先帝第五宮の挙兵については『梅松論』や『増鏡』にも、

近江美濃伊賀伊勢ノ悪党人等旗ヲアゲ楯ヲツキナラベ、海道ヲ塞ギ攻戦間、一昨日七日洛中ノ合戦、昨日八日野臥ニ打モラサル、輩、人馬ツカレテ進ム事ヲ得ズ（『梅松論』）

さて御幸は近江の国におはしなう程に、伊吹といふほとりにて、なにがしの宮とかや、法師にていましけるが、先帝の御心よせにて、かやうの方もほの心え侍けるにや、待ちうけて矢を放ち給ふ。（『増鏡』）

とあり、また『観音寺文書』にも観音護国寺衆徒が第五宮の令旨に

より参戦したとみえ、先帝第五宮軍の挙兵は事実だったようである。彼らは「山立・強盜・溢者」・「悪党人」とされる、いわゆるあぶれ者たちである。しかし「錦ノ御旗」を掲げた官軍でもあった。この旗について市沢哲氏は「行動の中心にあるのは皇子ではなくあぶれ者たちで、彼らの働きかけによって皇子はまつりあげられ、あぶれ者の集団は錦旗を掲げる「官軍」に姿を変えた点が注目される」と述べ、そしてこのような「在地から生み出される官軍が自ら掲げた錦旗」を「内乱期錦旗」と規定する²⁸。さて『太平記』の旗に関する記述をみると、

朝霧ノ晴行マ、ニ、越ベキ末ノ山路ヲ見渡セバ、錦ノ旗一流峯ノ嵐ニ翻テ、兵五六千人ガ程、要害ヲ前ニ當テ待掛タリ、糟屋ニ陣ノ敵ノ大勢ヲ見テ、退屈シテゾ覚ケル。

とあるように、先陣糟谷宗秋は「錦ノ旗」を翻す敵を見て合戦を止め、後陣を待つことにしたとある。糟谷率いる六波羅勢は現主上たちを警固する身である。かたや先帝第五宮は遁世中の皇子であり、悪党たちに担がれてはじめて権威たり得た存在である。しかしそこに「錦ノ旗」があることで状況は一変、事が決してしまつたのである。悪党たちによって権威を与えられた先帝第五宮の姿と、六波羅勢に守られながらも野伏たちに射掛けられた現主上の姿とは対照的である。『太平記』は状況の変化に流される彼等たちの運命を切り取り、かつ「内乱期錦旗」の出現が六波羅勢にさらなる追い討ちを与えたことを描くのである。

以上みてきたように『太平記』は時間の経過を追うよりも、六波羅滅亡時に誰がどこでどのように生きたかに着目する。六波羅探題やその家臣たちだけでなく、下向に同行した主上や公卿、敵の先帝第五宮など様々な立場の人間を登場させ、彼らの身に起こった一つ一つの話を順にはめ込むことで六波羅滅亡までの流れを描く。それらは個々の話として独立していながらも、茫然とする両六波羅探題と陣頭指揮をとる糟谷、最期まで忠義を貫く糟谷と裏切った佐々木時信、極威を失う主上と権威を与えられる先帝第五宮など、その両面を対で描くことで、変転する状況と流転していく人々の姿を捉える。『太平記』はその時代に生きた人そのものに着目する。それは六波羅滅亡の場面だけに限らず『太平記』全体の特徴でもあるといえる。

四 『理尽鈔』が描く六波羅滅亡

『理尽鈔』は慶長・元和頃に流布したといわれる²⁸。その内容は『太平記』²⁹からいくつかの項目を掲出、「評云」として政道や兵法を論評、また「伝云」として異伝や秘話を記す。本章は『理尽鈔』の異伝に注目し、『太平記』の六波羅滅亡場面がどのように享受されたかを考察する。それはすなわち『理尽鈔』を通して『太平記』世界を映し出すことに繋がる。

蓮華寺で何人の六波羅勢が自害したか。『太平記』は最初に六波羅探題北条仲時が自害。次いで糟谷三郎宗秋が切腹。以下、佐々木

隠岐前司から愛多義弥次郎まで計一五七名の名前を列挙した後、「是等ヲ宗徒ノ者トシテ、都合四百三十二人、同時ニ腹ヲゾ切タリケル」と記す。これに対し『理尽鈔』は「伝云」として次のように述べる。

伝云、自害の兵卅二人、仲時を加えて卅三人なり。然るを四百人増したる事は、元朝へ渡せし時書しとにや。

『理尽鈔』は、四百三十二人が切腹したとする『太平記』の記述は異国に對しての誇張であり、実際に自害したのは三十三人とする。そして彼等の最期を『太平記』にはない異伝でもって記す。例えば仲時自害の場面では、『太平記』は仲時・糟谷宗秋・佐々木隠岐前司の順に自害するが、『理尽鈔』は最初に糟谷宗秋が「手本を御目に懸べきにて侍る」と切腹。次に自害に踏み切れない仲時の首を隠岐前司清高が打ち落とした後、清高自身も腹を掻き切ったとある。これは『太平記』の記述とは大きく異なる³⁰。そこで切腹した人々の名前の配列をみると、『太平記』諸本との関係や『理尽鈔』のこだわりが透けて見えるのである。

『理尽鈔』には自害した人々として仲時、糟谷宗秋、隠岐の前司清高、父子三人、高橋九郎左衛門、舎弟大五郎、隅田源七左衛門、郎等二人、上井三郎、村田日向守、安藤太郎左衛門入道元理、中布利五郎左衛門吉治、岩見三郎、武田下条十郎、関谷、黒田、竹井、依藤、皆吉、塩屋、小屋木七郎、弟九郎、岩切六郎、岡田、吉井、壹岐孫四郎、窪次郎、糟谷弥次、伊賀、櫛橋、南父子、原左近、陶山備中守、小見山左兵衛、庄七郎、以上三十三人の名前を挙げる。

そして未だ指摘されていないことであるが、この『理尽鈔』に挙がっている名前は『太平記』古活字本とはほぼ同じであり、『太平記』西源院本・天正本、さらには『過去帳』とは名前の順序を異にする。これは「『太平記』の流布本系統のテキストが『理尽鈔』の底本であるといえよう」との見解とも一致する。つまり『理尽鈔』は『太平記』古活字本の順番に従って名前を挙げ、そこに個々の異伝を付加しているのである。

ただし『理尽鈔』と『太平記』古活字本とは名前の記載順がほぼ重なるものの、陶山備中守の位置付けが大きく異なる点は注意される。『理尽鈔』は原宗左近・陶山の順に記すが、『太平記』は原宗左近と陶山との間に六十八人の名前を列挙する。その中には足立・片山・石川・真土といった西国御家人もいれば、六波羅評定衆の備後民部大夫や六波羅奉行人の齊藤宮内丞の名前もみえる。しかし『理尽鈔』は彼らに関して一切触れず、陶山だけを抽出しその最期を描く。以上の点から、『理尽鈔』が『太平記』をただ踏襲したのではなく名前を取捨選択していたこと、そして『理尽鈔』は陶山に関心を寄せていることが窺える。

『理尽鈔』の陶山へのこだわりは、六波羅滅亡の場面において彼に関する異伝だけが二回にわたり記述されていることからわかる。一つは、逃げるところを見咎められて切腹した中布利五郎左衛門吉治の話である。中布利を咎めた人こそ陶山備中守であった。陶山は「良、御辺は何方へ行給ふぞ。(略)生て指をさされんより、死給へ」と言い、また「皆御辺の臆病異見を申れし(に)依て、(略)口惜

き負け仕てんげり。今又命を惜んで北げんとや。人倫の行跡に非ず」と述べる。陶山の言葉に中布利は何も言えず、そのまま立ち戻り切腹したと『理尽鈔』は伝える。もう一つは陶山の最期を描く場面である。「人々の自害を見すまし」た陶山は、二十八人の郎従に「汝等いかにもして本国に下て、我が子龜菊丸を人になして、二度家を続せよ」と遺言。それに対して小見山左兵衛は「余に供の之無は、御内に人無きに似て侍れば、三、四人は御供申せ。某は安きに付て死の御供ぞ」といい、庄七郎も「某は手負い侍れば、とても国まで着ず。御供」という。二人の申し出に陶山は「二人が事は謂れ有り。残は皆々帰れとよ。然ず(は)後生まで不忠の者ぞ」と論じて郎従等を帰した後、陶山は自害したとある。『理尽鈔』はこのような陶山の行動を「能郎等になさけ深かりけりとなり」と述べる。

『理尽鈔』が陶山氏にこだわる理由、それは『太平記』が陶山氏をどのように描写したかと関連する。陶山氏一族については第二章でも触れたように、『過去帳』は陶山氏二十名を挙げるのに対し、『太平記』は陶山次郎・同小五郎の僅か二人の名前を見出すのみである。おそらく『理尽鈔』は、六波羅勢として活躍した陶山氏が、滅亡に際しては華々しく戦う姿が全く描かれないことに敏感であったのではないか。『理尽鈔』の異伝は『太平記』記事中の謎や疑問の部分を読み明かしたり、前後の事情をおもしろく解説してみせたりしている³³とされる。つまり『理尽鈔』が陶山にこだわったのは、『太平記』六波羅滅亡場面における彼の記述に「謎や疑問」を抱いたからこそであり、六波羅勢の中でも重要な位置を占める陶山一族

の名が僅か二人しか記されていないことについて「解説」してみせたのである。而して陶山には二十八人の郎従がいたが「郎等になさけ深」い陶山が彼等を国に返したこと、「余に供の之無は、御内の人無きに似て侍れば」との小見山の言葉を受け、僅かな供回りだけを従え自害したという『理尽鈔』の異伝が生まれたのである。

おわりに

六波羅滅亡という時代の転換点から何を捉え描くのか。『梅松論』は時間の経過・蓮華寺までの道程を詳細に記すことで、六波羅勢の緊迫した状況と孤立してゆく様を語る。そして六波羅勢の死は主上との公武関係の中で切り取られることとなる。『過去帳』が記す蓮華寺での自害・討死した人々の名前からは、彼らが完全に孤立し、死を選択せざるを得ない状況にあったことを物語る。また六波羅勢の中でも陶山一族の犠牲が最も大きかったことが判明する。ところが『太平記』の六波羅滅亡場面では陶山氏の活躍を記さない。それは彼が六波羅勢勝利という構図の中に位置付けられた人物だからである。『太平記』は陶山氏に代わり、六波羅探題南方北条時益の家人である糟谷氏を登場させ、家臣の代表のように描く。そして積極的かつ最期まで忠義を貫く糟谷氏と対比させる形で、両六波羅探題や佐々木時信の姿を描くのである。すなわち六波羅探題北方北条仲時は妻子との別離譚、南方北条時益は糟谷七郎との主従譚といった枠組みの中で描写され、佐々木時信は六波羅勢を裏切った代表のよ

うに描かれるのである。六波羅探題やその家臣たちだけでなく、『太平記』は主上や公卿、先帝第五宮など様々な立場の人間を登場させる。そして茫然とする両六波羅探題と陣頭指揮をとる糟谷、最期まで忠義を貫く糟谷と裏切った佐々木時信、権威を失う主上と権威を与えられる先帝第五宮など、対照的な人生を捉えるのである。六波羅滅亡の瞬間に人々がどのように生きたのか、『太平記』はそのことに焦点をあてる。それら『太平記』の内容は『理尽鈔』によって享受されることとなる。『理尽鈔』では特に陶山氏に目が向けられ、情け深い陶山が二十八人の郎従たちを帰国させたとの異伝を付す。それは『太平記』が六波羅滅亡時の陶山氏の活躍を描かない、そのことを『理尽鈔』は異伝という形で解いてみせたのである。『太平記』が人々の動向に注目するが故に『理尽鈔』もまた、そこに描かれない人々の姿を語る。『太平記』は六波羅滅亡の構図の中で、その瞬間に生きる人の姿を通して変転する時代を切り取ってみせたのである。

【注】

- (1) 『太平記』本文引用は特に注記のない限り西源院本(刀江書院)による。
- (2) 鑑賞日本の古典13『太平記』(尚学図書・昭和55年)。
- (3) 『陸波羅南北過去帳』はコロタイプ製版による(菊華会本部、昭和54年)。
- (4) 谷垣伊太雄氏「足利高氏の役割―『太平記』巻九の構成と展

開一」〔樟蔭国文学〕第29号・平成4年。

- (5) 武田昌憲氏「『太平記』巻九、松寿の可能性 小考」〔茨女国文〕第11号・平成11年。谷垣氏・武田氏以外にも、崔文正氏は「『太平記』の死の諸相―北条軍団の滅亡をめぐる―」〔国文目白〕第33号・平成6年)の中で「北条氏の死は、武家武士道精神に徹底した姿だけで美化し、それで鎮魂しようとしたのではないか」と述べるが、その結論は聊か性急すぎると思われる。他に六波羅滅亡に関する史料を集めた荒井貢次郎氏「北条仲時軍勢自害をめぐる法宗教史的的分析」(一)・資料編(I)―中世・近江国・時衆・蓮華寺教団と過去帳の問題―〔東洋学研究〕第11号・昭和52年)がある。
- (6) 「梅松論」引用は京大本(京都大学文学部国語学国文研究室、昭和39年)による。
- (7) 「太平記秘伝理尽鈔」引用は東洋文庫による。
- (8) 「保曆問記」引用は群書類従本による。
- (9) 「神皇正統記」引用は日本古典文学大系本による。
- (10) 「増鏡」引用は日本古典文学大系本による。
- (11) 高橋昌明氏「六波羅探題の滅亡と番場宿」〔米原町史 通史編〕第二節「南北朝の動乱と室町時代」・平成14年。
- (12) 「過去帳」には六波羅探題北方北条仲時を筆頭に四十二人、「一向堂大庭討死」八人、「南方内人々」三十人、「一向堂仏前自害」百九人の名前を挙げており、糟谷氏の名前は「南方内人々」の中に見える。それが「六波羅南方時益の内衆」の

人々であることは注11高橋氏に指摘がある。

- (13) 岡見正雄氏校注『太平記』(一)補注 巻九一三〇(角川文庫・昭和57年)。
- (14) 注2鈴木氏論文。
- (15) 注11高橋氏論文。
- (16) 注11高橋氏論文。
- (17) 注2鈴木氏論文。
- (18) 陶山氏について多いのは、糟谷氏十三名、隅田氏十一名となっている。
- (19) 『太平記』諸本として本稿では西源院本・古活字本・天正本を比較検討した。西源院本は刀江書院、古活字本は日本古典文学大系、天正本は新編日本文学全集を用いた。
- (20) 注11高橋氏論文、細川諒一氏「荘園公領制の成立と鎌倉幕府」〔米原町史 通史編〕第一節・平成14年)。
- (21) 他にも、『過去帳』にみえる苅田氏は西源院本に登場せず、古活字本においても苅田氏は鎌倉で自害した内の一人としてみえるのみである。また桜田氏も鎌倉で戦う姿が描かれるだけで、六波羅滅亡場面には登場しない。
- (22) 『雑訴決断所結番交名』建武元年八月「七番 南海道」の中に「佐々木備中大夫判官時信」の名がみえる(大日本史料六編之一)。
- (23) 注2鈴木氏論文。
- (24) 注11高橋氏論文。

(25) 『太平記』(一) 補注九—二八(角川文庫・昭和57年)。

(26) 中沢哲氏『梅松論』における建武三年足利尊氏西走の位置——もうひとつの多々良浜合戦・湊川合戦——(神戸大学史学年報)第16号・平成13年)。また市沢氏は小山氏と興良親王との例を引き、「親王はそのままて即、権威たりえたのではなく、小山氏が同時に行動をとれる限りに於いて旗印、権威たりえたのである」とも述べる(『南北朝内乱期における天皇と諸勢力』、『歴史学研究』688号・平成8年)。錦旗の効力については伊東正子氏「中世の御旗——錦の御旗と武家の御旗」を参照(『歴史評論』497号・平成3年)。

(27) 加美宏氏「解説一『太平記秘伝理尽鈔』とその意義・影響・研究史」(『太平記秘伝理尽鈔一』、東洋文庫、平成14年)。

(28) 『理尽鈔』は『太平記』流布本系統を底本として、とされるため、本章の『太平記』引用は古活字本(日本古典文学大系)を用いた。

(29) 『理尽鈔』「名義并来由」に「又応永の比、唐船来朝す。唐の官人明尹此書を所望す。將軍義持、諸山の僧に仰て是を清書して、官人に渡すと云云」とあり、異国に渡したことがみえる。また巻三「赤坂城軍事」には「寄せ手三十万騎の事、古書(古抄)には四万余騎と有る。元国へ此書を渡す時、卅万騎と記せり。其故は、異国(元国)にも辺国へ書を渡に是如」とある。

(30) この仲時最期の話だけでなく、忠義心を失わなかった安藤太

郎左衛門入道元理の話、逃げるところを見咎められて切腹した中布利五郎左衛門吉治の話など、『理尽鈔』は『太平記』には記されることがない話でもって六波羅滅亡を描く。

(31) 加美宏氏『太平記享受史論考』(桜楓社、昭和60年)。長谷川端氏『太平記 創造と成長』(三弥井書店、平成15年) 参照。

(32) 注11高橋氏論文。

(33) 注27加美氏論文。